【発成した縮刷版から拾った大学生像の移り変わり】

21年　【コラム】……戦時は戦力の一端として学業を一擲（てき）したが（中略）今や社会に向かって進出し……

22年　【社会科学研究会調査】▽教員ストを支持する（34％）▽政治ストでなければ支持（60％）▽反対（６％）

23年　【自治会調査】（月平均）▽父兄からの仕送り（1417円）▽食費（1445円）▽本代（651円）▽アルバイトをしている学生（58％）▽アルバイト収入（1250円）▽山中湖畔の臨海寮は夏休みを迎えて盛況。リーべ同伴の申し込みも多い。

24年　▽自治委員会は、飢えせる学生生活を無為に見すごすのは不可能であると、学生生活対策委員会を作り、手始めとして栃木、茨城県の治水キャンプのアルバイト紹介を行う。

25年　【厚生委員会調査】（月平均）▽生活費4000円▽父兄からの仕送り（1250円）▽奨学資金（1190円）▽アルバイト（1140円）【大学厚生課アルバイト求人調査】▽特需会社夜間肉体労働（300円）▽教職員臨時役（250円）映画エキストラ（200円）

27年　▽角帽譲りたし。当方４年。幾分古びたれど貫録つきたるものなり。400ぐらい希望す。

28年　▽学生大会で小使さんが始業時間を８時半から９時にしてほしいと要望【大学新入生案内】（月平均）▽生活費・下宿生（6000円—10000円）自宅生（３—5000円）▽外食費（３—4000円）

29年　【新聞会アルバイト調査】▽アルバイト月平均収入（3255円）【厚生部調査】夕食▽米（６円）▽麦（３円）▽外米（４円）▽みそ汁（１円）▽サンマ開き（７円）▽平均（朝食20円、夕食27円）【新聞会アンケート】異性との付き合いの経験がある（50％）▽友だちとして（51％）▽恋人として（33％）▽親せきの異性と（８％）▽桐花寮の食事に黄変米が10粒中２粒の割で入っていたことが判明した。

30年　▽サークル機関誌に「サークル内での恋愛是か非か」の論争さかん。

31年　【わだつみ会調査】▽憲法改正に賛成（17％）▽反対（70％）

32年　【新聞会、学内食堂調査】１食当たり▽米食42円▽めん類（28円）▽パン（30円）

37年　【奨学生調査】アルバイト月平均収入（4400円）

38年　【新聞会意識調査】家庭の年収▽40万—50万円（14％）▽70万—90万円（13％）▽90万円以上（20％）

41年　【新聞会意識調査】10年後の日本のイメージ▽社会主義に移行（８％）▽イギリス型福祉国家（12％）▽発達した資本主義（14％）▽現状と変わらない（35％）

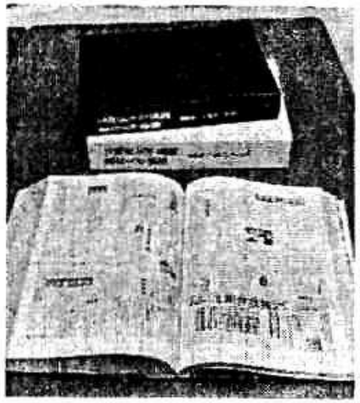
47年　【新聞会アンケート】▽自治会に関心ない（65％）▽クラス討論には参加しない（71％）

48年　最後の合格者一覧（５学部で1054人。これを最後に文・理・体育学部の募集は停止）

姿消す東教大　学生新聞は残った

初仕事、どちらも教科書問題

新聞会から本社記者の"運命"



みごと復活した東京教育大新聞

同新聞の編集長の一人に本社社会部の大谷健記者（四十五年卒）がいた。大谷記者は「教育大新聞会のころ」について、こんなふうに語る。

「反権力の魂がカバンを下げて歩いている——まん丸いワクの特徴のあるメガネをかけ、やせた小柄な家永三郎教授（日本史）のことを、学生たちはそう呼んでいたものだった。

その家永先生が書かれた高校用日本史教科書に対する文部省の検定が違法であるとして、教科書訴訟を起こしたのは昭和四十年六月十二日のこと。その前日、教育大学新聞会の会員になったばかりの私は、当日、先輩会員に連れられて、記者会見場へ行った。やや緊張した面持ちで、訴訟に踏み切った雄姿を示す家永先生の説明を熱心になってメモをとったものだ。

その五年後、私が朝日新聞社に入社して配属されたのが週刊朝日編集部。そこで最初に書いた原稿もやはり「文部省はこんな教科書検定をしている」という教科書問題についての特集記事だったのだから、めぐり合わせというものはおもしろい。

新聞会に入ってすぐの家永訴訟につづいて、その秋には光学科、朝永振一郎教授のノーベル賞受賞があったり、教育大新聞にとってもハイライトといえる事件が続いた。二年、三年になると、文学部の学生というより新聞会の学生といった生活で、大学へは毎日行くのだが、授業にはほとんど出ず、大塚キャンパスの隅にあるバラック建ての部室へ直行。会議、取材、原稿書き、紙面割り付け、印刷所通い、広告とりと、新聞づくり中心の生活になった。

取材で各学部の先生に会う機会が多く、ずいぶん顔を覚えていただいた。試験の日に教室に行くと、そんな先生から「授業にも出なさい」と笑いながら注意された。

筑波移転問題では四十三年に文学部自治会はストライキに入り、全学封鎖ということになった。私も移転反対のスト派学生だったから、大学に泊まったり、授業に出なくなったり。その当時、読売新聞でこの問題の取材をしていた記者とも口論をしたことがある。かなりしつこくからんだようで、地方総局勤務になって、社会部の記者クラブへ転勤してきたとき、そのＫ記者とばったり。「あの時はよくいじめられたなあ」と話しかけられた。今でも、記者との笑い話になっている。

学生新聞小史

刊行された「文理科大学新聞・教育大学新聞」の縮刷版から拾う。敗戦の翌年二十一年に発行された「文理科大学新聞」創刊号に始まる。当時の務台理作学長が「学生に望む」と題する巻頭論文を寄せ、田中耕太郎文部大臣が創刊についてお祝いの言葉を寄せている。書籍広告欄「社会思想新書」、「ゴリキイ選集」などの書籍広告も。「再刊」「復員」の文字が踊り、新生への意気がうかがわれる。

二十四年七月に題字は「教育大学新聞」と変わる。朝鮮戦争前夜で、逆コースを警戒する学生の敏感さが紙面からもうかがわれる。東京高師の新制大学切り替えを含め、新しい教育学校の近代化も。

自治会活動、全学連的な学生運動も活発化。

学生運動が時代を画する六〇年安保のころになると、毎号、安保改定反対の記事が一面トップを埋めた。朝永振一郎学長も反対の立場を表明、自治会活動が盛り、学生一体だったことを知らせてくれる。紙面は、学内の研究紹介、読書欄、学内批評とバラエティーに富んでいる。

四十年六月、家永三郎教授が教科書裁判を起こす。これを教育の自由に関する問題だけに、学内の関心は高まり、「支援する会」も生まれた。朝永博士がノーベル物理学賞を受賞したのもこのころで、詳しく紹介されている。

三十年代後半から検討されて来た筑波移転が四十一年ごろから具体化、学内は理学部を先鋒とする移転派、文学部中心の反対派に分かれ、大揺れに揺れる。四十四年を頂点とした全共闘運動の先鋭化とともに、学内は四分五裂。紙面そのものも、七〇年代に入り、学生運動の一部のセクトの"機関紙"化の趨も見せ、アジ調が目立ってくる。四十八年四月終刊の前兆でもあった。

あいさつをかわす最後の卒業生たち

戦後、新制大学がお目見えして以来、廃校になった大学は、まずない。だから、筑波大学への移転に伴い、今月の末で姿を消す東京教育大学の場合は、関係者の間にさまざまな波紋を描いた。母校のふん囲気を伝え、青春時代を思い起こすよすがとなるものを残したい。そんな思いを多くの関係者たちが抱いた。同大学の新聞会ＯＢたちも同じであった。その思いが「大学新聞縮刷版」の発刊という形で、このほど、見事に結実した。縮刷版は、大学の歴史、大学生活の移り変わりを、学生の目を通して的確に映し出している。

思い出込め縮刷版に

ＯＢ、ホコリの束を集め

縮刷版を出した水沢さん（左端）森山さん（右から２人目）ら刊行会のメンバー

東教大の筑波移転が話題を沸した一昨年春、新聞会ＯＢの水沢千秋さん（四十七年卒）はふと思った。「自分たちの出した学生新聞はどうなったろう」。いても立ってもいられなくなり、先輩の出版社社長、森山光久さん（三十年卒）に話した。とにかく、母校に行き、様子を見ようということになり、水沢さんが文学部の同大学に出かけてみると、新聞会のドアはクギ付けされたままで、新聞の山がホコリをかぶっていた。

このままでは捨てられてしまうと、水沢さんは新聞の束を車でとりあえず持ち出し、森山さんの会社の倉庫に運び込んだ。二人で整理を始めた。戦後間もなくのころを除いて、かなりのバックナンバーがそろっていた。欠けている新聞をどこかで探せば、学生新聞だけで、一つの"東京教育大史"がまとめられる。二人はそう考えたという。

二人は昨年七月に開かれた新聞会ＯＢ総会で、そんな思いを訴えた。

「とにかく筑波では"官製"の新聞を第一号から出しているんで私たちが積み重ねて来た学生の手による新聞の歴史はこれで終わりです。ほうっておけば、いずれ紛れたもなくなってしまうのでは——」。ちょっと大げさにいえば、そんな危機意識も強かったと、森山さんたちはいう。

もともと、モノを書いたり出版したりが好きな仲間たちばかり。「金がかかるからマイクロフィルムにして保存したら」という話もあったが、とにかく縮刷版を出版しようということになった。ＯＢ百三人で「刊行会」を作り、事務局を森山さんの経営する績文堂（新宿区山吹町八一、電話二六〇—二四三一）に置いて、作業を始めた。費用は会員一人三万円ずつ出し合い、二十五人の刊行会員はさらに「出資会」として十万円を出し合った。こうして約三百五十万円の資金が集まった。

「ウチの卒業生は教師が多く、お金の厳しさを知らない人もいますから、心意気だけじゃ本はできないんだ、ということを知ってもらおうと思ってカンパを集めたんです」・会社員、菅原敏郎さん（三十三年卒）の話。

メンバーたちは、バックナンバーを整理し印刷屋などと交渉する係、年表作りや全体のレイアウトを担当する編集係、東教大の卒業生にＰＲして本の予約を取る渉外係の三班に分かれてがんばった。

時には、ＯＢがいる会社の会議室などを夕々で借りたりしながら、本づくりにＯＢたちは追った。

欠けていた新聞も結局、八分だけがどうしても見つからなかったが、東京文理科大学新聞の創刊第一号（二十一年七月十日付）から、東教大が最後の卒業生を迎えた「新入生歓迎号」（四十八年四月十日付）の最終号五百五十一号までがそろった。こうしてＡ４判千三百七十ページの縮刷版が出来上がったのが、先月末。千部印刷したが、全費用は七百万円ほどかかったという。

卒業生たちの評判はよかった。予約分に追加注文を加えて、すでに七百部近くを売りさばいた。ウワサを聞いた学外の人からの注文もあり、刊行会では一冊一万三千円で希望者に譲ることも決めた。森山さんらは「ようやく母校の記録が残る見通しがつき、出資金も返せそうです」と話しながら、いま、"よみがえった新聞"の発送に追われている。